

CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.113 January, 2012

目次

アジア太平洋研究センター(CAPS)からのお知らせ ... 1	第3回講演・白石さや氏
報告・CAPS 設立30周年記念連続講演会	「私はここに属さない
「人間の安全保障と東北アジア」(後期)	グローバル化の時代の若者文化を考える」
第1回講演・岩淵功一氏	CAPS 特別研究員 趙貴花 7
「多文化社会と越境対話	報告・CAPS 主催 共同研究プロジェクト中間報告会
文化シティズンシップの実践」	CAPS 主任研究員 愛甲 雄一 8
文学部准教授 川村 陶子 3	報告・CAPS 招聘外国人研究員との研究交流
第2回講演・駒村康平氏	Some Thoughts on 'Brush Talks'
「高齢化とグローバル経済のなかの社会保障の行方」	ドイツ・ミュンヘン大学専任講師 Steffen Döll 10
CAPS 客員研究員 渡邊 大輔 4	Steffen Döll 氏講演
第3回講演・酒井裕司氏	「『筆を以って舌を傳ふ、眼を將って辭を聽す』
「中国での環境問題解決への実践的アプローチと課題」	中世東亜における文化交流を巡って」を聴いて
理工学部教授 山崎 章弘 5	文学部教授 三浦 國泰 12
報告・CAPS 主催連続講演会	シリーズ・本を読む
「グローバル化時代の人の移動とアイデンティティ」	Alex Gardner, Richard Bartlett, and Janice Gray,
第2回講演・藤田結子氏	Water Resources Law (LexisNexis, 2009)
「文化移民 国境を越える若者と	CAPS 所員(法学部准教授) 北島 周作 13
ナショナルなアイデンティティ」	アジア太平洋研究センター(CAPS)活動報告 13
文学研究科 M2 年 松浦 光 6	

アジア太平洋研究センター(CAPS)からのお知らせ

成蹊学園創立100周年・成蹊大学アジア太平洋研究センター(CAPS) 設立30周年記念
国際シンポジウム
人間の安全保障と東北アジア—デモクラシーとコミュニティの未来
2012年3月17日(土)13:00~ / 3月18日(日)13:00~



アジア太平洋研究センター(CAPS)では今年度(2011年度)のセンター設立30周年、ならびに来年度に控えた成蹊学園創立100周年を記念して、昨年度後半よりこれまで7回に渡り「人間の安全保障と東北アジア—サステナブルな地域社会をめざして」と題した連続講演会を開催して参りました。そしていよいよ年度末の3月17日(土)・18日(日)、日本のみならず韓国・オーストラリアからも専門家をお招きして、本企画の集大成とも言える国際シンポジウムを開催致します。

去年3月に発生した東日本大震災、およびフクシマにおける原発事故は、今日私たちの生活が幾多のリスクに取り囲まれていることを、白日のもとに曝し出しました。今やこうしたリスクに迅速かつ効果的に対処し、人びとが安全かつ安心して暮らせる社会を作り出すことが、国内的にも世界的にも求められています。そしてその対応策として注目されているのが、デモクラシーとコミュニティの再生に他なりません。デモクラシーの行き詰まりやコミュニティの崩壊が指摘される中、「絆」や「連帯」の必要性が叫ばれるのは、まさに人びとがその再生に未来のあるべき姿を見出しているからではないでしょうか。本シンポジウムでは、このデモクラシーとコミュニティの未来をメイン・テーマに、将来におけるその可能性を探ってみたいと思います(本シンポジウムの講演者などは、次頁をご覧ください)。

成蹊学園創立100周年・成蹊大学アジア太平洋研究センター設立30周年記念
国際シンポジウム
人間の安全保障と東北アジア デモクラシーとコミュニティの未来

<p>1 日目・2012年3月17日(土) 13:00 ~ 18:00 主要テーマ：デモクラシーの未来 基調講演者：杉田 敦 (法政大学) パネル討論者：金子 郁容 (慶應義塾大学) プレンダン・ハウ (韓国・梨花女子大学) 川村 陶子 (成蹊大学) 司 会：遠藤 誠治 (成蹊大学)</p>	<p>2 日目・2012年3月18日(日) 13:00 ~ 18:10 主要テーマ：コミュニティの未来 基調講演者：広井 良典 (千葉大学) パネル討論者：小林 重敬 (東京都市大学) テッサ・モーリス＝スズキ (オーストラリア国立大学) 金 王培 (韓国・延世大学校) 沈 潔 (日本女子大学) 司 会：中神 康博 (成蹊大学)</p>
--	--

会場：4号館ホール
 同時通訳あり、参加費無料、事前申し込み不要、各日とも先着400名まで

国際交流の集い
「アルバニア～小さくとも美しくこのうえない国」
を開催致します

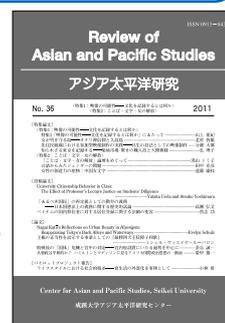


アジア太平洋研究センター (CAPS) では2月1日(水)の14時(1号館1階コモンルーム)から、駐日アルバニア大使夫人であり昨年度から客員研究員として当センターに在籍しているディダ・レコ (Dida Reko) 氏をお招きして、アルバニアの言語・歴史・文化などについて語っていただく会「国際交流の集い アルバニア～小さくとも美しくこのうえない国」を開催致します。日本ではほとんど知られていない

国・アルバニアについて、ご興味をお持ちの方はぜひご参加ください。参加費は無料ですが、事前のお申し込みが必要です。参加希望の方は、センター事務室までご連絡ください。

センター紀要
『アジア太平洋研究』最新号
が発行されました

年に1度、アジア太平洋研究センター (CAPS) が発行している紀要『アジア太平洋研究』の最新号 (No.36・2011年) が、発行されました (目次は下記)。



センターその他において、無料にて配布しておりますので、ご興味のある方は、センター事務室までご一報ください。

『アジア太平洋研究』(No.36・2011年) 目次

特集1：映像の可能性	文化を記録するとは何か	
特集1「映像の可能性	文化を記録するとは何か」にあたって	山上 亜紀
女が男を守る島	オナリ神信仰と久高島	北村 皆雄
先住民組織における参加型映像制作の実践	共生の技法としての映像制作	分藤 大翼
知られざる東京を記録する	築地市場 驚きの職人技と人間模様	弘 理子
特集2：ことば・文字・女の解放		
「ことば・文字・女の解放」論壇をめぐって		湯山 トミ子
言語からみたジェンダーの問題		田中 克彦
女性の創造力の産物：中国女文字		遠藤 織枝
各種論文		
University Citizenship Behavior in Class: The Effect of Professor's Lecture Justice on Student's Diligence		Yutaka Ueda and Atsuko Yoshimura
「あるべき国民」の再定義としての勤労の義務	日本国憲法上の義務に関する歴史的試論	高瀬 弘文
ベトナムの国内移住者に対する居住登録に関する法制の変容		貴志 功
Nagai Kafu's Reflections on Urban Beauty in <i>Hiyorigeta</i> : Reappraising Tokyo's Back Alleys and Waterways		Evelyn Schulz
王権の正当性を誇示する事業としての『最勝四天王院障子和歌』		ミシェル・ヴィエイヤール＝パロン
敗戦後の「国体」危機と宮中の対応	宮内府設置にいたる過程を中心に	茶谷 誠一
共和政は平和的か? ハミルトンとマディソンに見るアメリカ国際政治思想の一面		愛甲 雄一
ライフスタイルにおける社会的格差	食生活の外部化を事例として	小林 盾

報告・アジア太平洋研究センター設立30周年記念連続講演会
 「人間の安全保障と東北アジア サステイナブルな地域社会をめざして」(2011年度後期)

第1回講演・岩淵功一氏(早稲田大学教授)

「多文化社会と越境対話 文化シティズンシップの実践」

文学部准教授 川村 陶子

CAPS設立30周年記念連続講演会の2011年度後期における第1回目は、岩淵功一氏(早稲田大学国際教養学部教授)を迎え、10月15日に開催された。岩淵氏は『文化の対話力』(2007年)、『多文化社会の「文化」を問う』(2010年)等の著作を通して、グローバル化時代における人のつながりの可能性を、メディア文化に着目して論じてきた。今回の講演は、岩淵氏のこれまでの研究を総括する内容であり、「境界を越える」ことの意味を考えるための示唆に満ちていた。

講演は、今日における越境対話の重要性を確認するところから始まった。市場主義の浸透に伴う社会の分断や格差拡大の反動として、ナショナルな共同体への郷愁や「他者」への排外的感情が強まっている。生きにくさの中で、「3・11」後の日本にみられ



〔写真は講演中の岩淵教授〕

るように、相互のいたわりを求める動きが出てきている。国境を越える -- ここでの国境は広義である -- 取り組みは、そうしたつながりを求める動きの先端に位置づけられる。岩淵氏は、越境対話を、越えるべき境界そのものへの疑い、他者の理解よりも自分との対話、国際だけでなく国内に引かれた境界そして両者の重なりへの視座、という三点で特徴づけ、東アジアを日本の私たちが取り組むべき対話の主要な場ととらえた。その後、以下の三つのテーマに沿って、本論を展開していった。

東アジアにおける文化交流の現在。サッカー W杯共催を契機とした韓流の波は、日本人の韓国に対する距離感を急速に縮めた。しかし日韓の「国際 = 国家間」交流が深まる一方、在日コリアンたちはその存在が見えないか、韓国という窓を通してしか可視化されないという微妙な立場に置かれた。メディア交流は国を越えたつながりをつくるきっかけになるが、国内の多様な境界をも越えることは難しい。政府もまた、メディアや大衆文化の交流ブームを国

策に利用しようとしている。安易な文化外交は国家間の問題を解決しないばかりか、逆に幅広い民益や対話を後退させかねない。

社会のさまざまな次元における多文化状況の交錯。東アジアの越境対話推進には、国という鎧を脱ぎ捨て、社会の諸次元で深化する多文化状況に腰を据えて取り組むことが必要である。そこでは、メディアの移動だけでなく、人間自体の国際移動、さらには国内に存在する多様なマイノリティへの目配りが不可欠である。日本では主に地方レベルで、多文化共生をキーワードに外国籍住民との関係構築が試みられてきた。しかし、「外国人」や「外国文化」との交流が強調される一方で、他の少数者の存在は隠されており、多様な人びとを社会の対等な構成員とみなす姿勢は希薄である。

越境対話を育む文化シティズンシップの実践。

多文化 が多角的に交錯する中で他者とのつながりを構築する手がかりとして、岩淵氏はシティズンシップの概念に注目する。同概念に関しては、これまで主に政治的・社会福祉の側面を中心に議論されてきたが、文化的差異の尊重と市民としての平等な扱いという観点からの「人間の安全保障」が求められている。とりわけ、自分の声を発し、理解され、共有されるコミュニケーションの権利の保障が重要であり、そのためにはメディアシステムの刷新が必須である。

岩淵氏によれば、対話とは「他者の理解」「他者との合意」よりもむしろ、共に聞き話し合うこと、歓待すること、気遣うこと、そうした喜びに向けた自己変革の実践である。私たちが直面する問題を解決するには、国家の枠は「大きすぎ、小さすぎる」。適切な規模の公共空間を構築するために、岩淵氏は竹内好に倣う形で 方法としての東アジア を提唱し、講演を締めくくった。

質疑応答では、日本の文化外交、公共空間としての東アジア、日本の「島国性」などをめぐってやりとりが交わされた。筆者の印象に残ったのは、「対話は自分の思い込みを変えることから始まる」という岩淵氏のことばである。私たちの意識には国という枠組みが深く染みついているが、国民もまた想像の共同体であるならば、一人一人の意識を変えることで国境は乗り越えられる。国内外に閉塞感が漂う中、新しいつながりの構築に向けて私たちに勇気と希望を与えて下さった岩淵氏に、心からの感謝を示したい。

第2回講演・駒村康平氏(慶應義塾大学教授)

「高齢化とグローバル経済のなかの社会保障の行方」

CAPS 客員研究員 渡邊 大輔

2011年11月12日、成蹊大学3号館102教室にて、成蹊学園創立100周年・成蹊大学アジア太平洋研究センター設立30周年記念の連続講演会「人間の安全保障と東北アジア サステイナブルな地域社会をめざして」の2011年度後期における第3回目の講演が行われた。この講演会では、慶應義塾大学経済学部の駒村康平教授を招き、「高齢化とグローバル経済の中の社会保障の行方」と題して、社会保障の現状や問題点についてお話を頂いた。

駒村教授は、現在の日本社会が抱えている課題を大きく次の4点指摘する。大規模自然災害のリスク、グローバル経済による影響(雇用、教育、社会保障・税、産業・金融の4システムの見直しの必要性)、人口構造変化(少子高齢化と単身世帯の増加)そして財政赤字である。ここでとくに重要な点は、とである。だが駒村教授は、財政問題を考えるうえでしばしば指摘される「無駄の削減」の実効性には疑問があると指摘する。日本の社会保障給付費は概算で105兆円であり、このうち年金がほぼ半分の53兆円を、医療費が3分の1近い32兆円を占める。これらはけた違いに大きい額であり、事業仕分けなどで議論される数億円～数百億円単位の「無駄の削減」は重要であるものの、全体から見れば誤差に過ぎない。国民感情は別として、制度として考えたとき、制度そのものへの対策なしに問題解決をすることができないのである。

このように社会保障制度を取り巻く日本の問題を説明したうえで、社会保障について、とくに年金制度と生活保護制度について現状の問題と対策について説明がなされた。年金制度の問題は多岐にわたり、情報不足による制度への信頼の欠如や誤解、政府による説明の問題、世代間の協力体制の構築の必要性、財源の均衡化、非正規労働者の増加による未納者の増加などがある。駒村教授はメディアの間



〔写真は講演中の駒村教授〕

違った報道による誤解が多い点もあるが、「100年安心年金」など政策の標語自体がいい加減であり、「嘘のラベル」でしかないなど政府の問題も大きいと指摘する。そこで対策の方向性として3つの指針(働き方・ライフコースの選択に影響を与えない一元的な制度、最低保証機能を有し高齢者の防貧・救済機能が強化された制度、信頼され財政的にも安定した制度)を提示し、所得の低い人のみに税金で補てんする補足年金方式へと変更してゆく必要性が述べられた。

生活保護制度については、メディアにおいて若者の不正受給などが指摘されているが、実際には若い人の受給者は少なく、高齢者が半数を占めていることが紹介された。しかし問題点として、若年層の世帯貧困率は上昇しており、若年層の貧困問題と生活保護受給の実態にギャップがある点が指摘された。

このほかにもさまざまな論点が説明されたうえで、すべての人々の等しく給付できるわけではないという財政上の限界を見据え、中間所得層を還元し、格差の連鎖の防止をするための経済・社会保障政策の必要性、分厚い中間層の復興と、目先の問題にとらわれない視点の重要性が指摘された。

講演の最後で、本学名誉教授の故市井三郎の『哲学的分析:社会・歴史・論理についての基礎的試論』(1963)を引き、歴史とは唯物論的に規定されているものではなく、私たち自身が選択できるものであるとする市井の歴史哲学が紹介された。そうであれば、目先の利益に捉われず、社会の未来像について具体的なイメージを持ち、社会の諸法則を把握、分析し、次の歴史を構想し推進することが私たちのタスクとなる。そこで、市井が学生やOBGだけでなく、市民とともに長年取り組み続けた市井三郎自主ゼミナールの取り組みを紹介し、次の社会保障制度を、そして次の歴史を作るための“熟議”の必要性を述べられて、講演の締めくくりとなった。

駒村教授の講演は、制度が複雑に入り組んでおり、また非常に多岐にわたる社会保障について、具体的な数字やグラフを用いながら、メディアによって誇張されたり曲解された知識を正しい知識へと導くものであった。ここで得た知識や、今後の正しい理解を経て、次の社会保障制度を構想するための熟議に参加することが私たちの課題となるだろう。

第3回講演・酒井裕司氏(工学院大学専任講師)

「中国での環境問題解決への実践的アプローチと課題」

理工学部教授 山崎 章弘

去る2011年11月26日(土)に工学院大学・酒井裕司氏を迎えて、成蹊大学8号館101号教室にて成蹊学園創立100周年・成蹊大学アジア太平洋研究センター設立30周年記念連続講演会の2011年度後期第3回講演会、「中国での環境問題解決への実践的アプローチと課題」が行われました。この講演会は、成蹊大学アジア太平洋研究センター設立30周年および成蹊学園創立100周年を記念し、「人間の安全保障と東北アジア サステイナブルな地域社会をめざして」をメインテーマに開催している連続講演会の一環として行われたものです。参加者は50名でした。

酒井先生は、東京大学大学院工学系研究科化学システム専攻で故定方正毅教授のもとで学位を取得された新進気鋭の研究者で、現在は、工学院大学工学部環境エネルギー化学科で専任講師を務められています。酒井先生は、学生時代より恩師故定方教授のもとで、中国における環境問題解決という壮大なテーマに取り組んで居られています。今回の講演では、酒井先生が中心になって研究を進めてこられた、中国における「バイオブリケット利用の普及」を軸にお話ししていただきました。

バイオブリケットというのは、粉状の石炭に様々なバイオマスや石灰を混合して成形した固形燃料のことで、燃料として用いられるだけでなく、燃焼時に硫黄分(二酸化硫黄)を取り除く「脱硫」も同時に行えるものです。脱硫とは、硫黄分を含む石炭を燃焼させた際に発生する亜硫酸ガスを取り除いて排気ガスをクリーンにする技術で、1960年代から1970年代に日本が世界に先駆けて技術開発を行ったものです。これは、4大公害の一つである四日市ぜんそくの原因が亜硫酸ガスであったことが大きな理由で、現在日本ではほとんどの燃焼施設に脱硫設備が導入されています。また、亜硫酸ガスは酸性雨の原因ともなります。中国ではエネルギー源の70%以上を石炭が占めています。石炭には硫黄分が多く含まれており、燃焼すると亜硫酸ガスを排出します。しかしながら、コストの関係で中国ではまだまだ脱硫設備の普及が進んでいません。酒井先生たちは、中国の先生方と協力して、「バイオブリケット」と呼ばれる石炭をベースにした新しい燃料を用いて、燃焼と同時に脱硫を行う技術の開発に取り組んでこられました。中国の各地でバイオブリ

ケットを用いた燃焼プロセスの実証試験を行い、数々の成果を収められています。また、燃焼後のバイオブリケット灰を酸性土壌の改良材として用いることも試みられており、中国各地の土壌で作物の生育を促進することを実証されています。講演では、これまでの取り組みや実証試験の成果を豊富なデータや写真を使ってわかりやすく紹介していただきました。

酒井先生はこのような技術的な研究開発の他に、社会科学的、経済学的な観点からも研究を進めておられます。いくら優れた技術を開発しても、実際にその技術が普及しなければ意味がありません。中国での脱硫設備の普及を阻んでいるのは第一にコストです。バイオブリケット技術の普及を促進するためには、環境の観点からだけでなく、経済的なインセンティブをどのように与えるかが重要になります。これは、結局環境、経済、政策をも含めた社会システムの設計・構築の問題につながります。この観点から、酒井先生は、経済学者等と協力しながら、社会科学的な観点からのバイオブリケット技術の普及、導入についても研究されています。講演では技術的なお話だけでなく、社会科学な観点からのお話も伺うことができました。

酒井先生は学生時代より中国渡航歴数十回にも上り、日本の他のどの研究者よりも「現場」の場数を踏んでいらっしゃいます。今回の講演では、このような経験豊富な方からの、時折ユーモアを交えながらの、しかし地に足に付いたお話を聞くことができました。なお、今回、講演をお願いしたのは、筆者が現在、酒井先生、東北大学・飯塚淳先生と共同で2011年度より取り組んでいるアジア太平洋研究センター共同研究プロジェクト「中国の廃コンクリートリサイクル研究」を行っている関係ですが、今後こちらのプロジェクトの成果に関してもご期待ください。



〔写真は講演中の酒井講師〕

報告 アジア太平洋研究センター主催連続講演会

「グローバル化時代の人の移動とアイデンティティ：若年層に着目して」(全3回)

第2回講演・藤田結子氏

「文化移民 国境を越える若者とナショナルなアイデンティティ」

文学研究科日本文学専攻 博士前期課程2年 松浦 光

去る10月26日成蹊大学10号館2階第二中会議室にて連続講演会「グローバル化時代の人の移動とアイデンティティ：若年層に着目して」が開催された。今回は全3回のうちの第2回目、テーマは「文化移民・国境を越える若者とナショナルなアイデンティティ」である。講演者は明治大学商学部准教授の藤田結子氏だ。講演会場には本学の学部生や教員も多く集まり、終始和やかな雰囲気では進められた。本記事ではその講演の様子を報告する。

あなたはどんな時に、自分が日本人だと意識することがあるだろうか？ 現在、世界中で急激な交通網やインターネットの発達によって人々も情報も容易く国境を越えられるというボーダレスな状態が、既に生まれてきている。海外の主要な都市には多くの移民が溢れ、二重に国籍を持つ者も珍しくない。すると、ある単一のネイションに属するという感覚も薄れ、2つ以上のネイションに帰属するトランスナショナルなアイデンティティが芽生える者まで現われる。その中で、海外に移動した後の日本人のアイデンティティには、どのような変化が生じるのか。この疑問が本講演の核になっている。

講演は、藤田氏がニューヨークとロンドンに渡った日本人を対象にして行なったフィールドワークをベースにしたものである。そこには、海外に文化的な活動の場を求めて移動した「文化移民」とも呼べる2種類の日本人が登場する。第1のグループはダンスやアートなど華やかな文化的生活に憧れて海外に渡った男女22名であり、第2のグループは、アーティストとして海外に渡り様々な分野で国際的な評価を得て「成功者」となった男女18名だ。

第1グループに属す人々には、中流家庭の両親に依存してフリーターや派遣など不安定な職に就いている若者が多く、それでも海外に渡って成功しようとする思考が強い傾向がある。しかし、世界地図を書かせるとその地図にはアジアが欠けているなど、世界に関する彼らの知識は極めて乏しい。また、移住者やエスニックマイノリティが抱える問題への現実感も、渡航前の彼らにはほとんど見られない。彼らは、海外に渡れば誰もが文化的な世界の中で成功者になれる、というメディアが伝えるポジティブな

幻想に強く影響されている。ところが、彼らの多くが渡航後に直面するのが、厳しい生活や人種的・社会的な差別である。その結果、日本人としてのアイデンティティが以前より強くなってしまいう傾向が、彼らの間に強く見られた。結局、このグループでは文化的な成功を海外で成し遂げた、と言えるのは1名だけで、あとは転職や国際結婚、あるいは日本への帰国など、当初描いていた未来とは違う道を歩む結果になった。

第2グループに属す特徴は、豊かな両親の支援もあって海外においても元々高い経済力や文化資本を築いている傾向があることだ。しかしながら、彼ら



〔写真は講演中の藤田准教授〕

の目指す作品では「日本らしさ」が押し出されることはあまりなく、創造性や機能性や新しさといった「普遍的な」価値が求められることがしばしば見られる。だが、作品を評価する現地の人々にとっては、その色や形や構造が日本的に映ってしまうことが多い。本人達は特に意識していなくても、現地の人々による意見や評価に晒され、自分が日本人であることを常に意識させられてしまうのだ。それらが彼らの間において、日本人としてのアイデンティティの再形成・再発見につながることになる。

両グループについての調査から導き出されることは、海外に移動する日本人の間には、トランスナショナルなアイデンティティを持つことが少ない傾向にあることだ。海外に出ると日本人だからこそ直面する現実というものがあり、また現地の人々によって日本人だと意識させられる場面にも多く遭遇する。それが日本人であるという意識をより強固なものにするというのが、本講演における藤田氏の結論だった。

最後に私が本講演を通じて考えたことを簡単に述べておきたい。日本人は海外で直面する現実やまた持つことを否応なく強いられる意識を予め想定しておくべきだ。そのために、ボーダレスな世界になりつつあることを理解し、様々な国の文化や歴史に関心を持ち続けることが大切だ。同時に、最低限の自国の文化や歴史は知っておく必要があるのではないだろうか。こうした姿勢が異文化での軋轢を軽減させ、世界の国々と親密な関係を築く大きな架け橋になるのだと、私には思えてならない。

第3回講演・白石さや氏

「私はここに属さない グローバル化の時代の若者文化を考える」

CAPS 特別研究員 趙 貴花

2011年12月8日(木) 本学9号館において、東京大学の白石さや教授をお招きした講演会が開催された。今回の講演会はアジア太平洋研究センター主催の連続講演会で、6月16日の「アジアにおける留学生の移動と教育」と10月26日の「文化移民：国境を越える若者とナショナルなアイデンティティ」に次いで、3度目の催しとなる。当日はセンター関係者のほか、学内の教職員や学生、他大学の学生及び市民の方々が集まり、教室がほぼ満室になる盛況を呈した。

従来、若者文化は子どもから大人になる過程で通過し卒業するものとして、比較的軽視されてきた、と白石教授は語り始める。しかしIT革命がグローバル・ネットワークの形成を可能で容易なものとし、若者がその情報技術の主要な担い手となることで、状況は変化した。若者文化はもはや「通過し卒業する」ものではなく、新しい社会と文化の設計図となり、若者たちによって新たなライフスタイルやアイデンティティが生まれつつある。

続いて白石教授は、実はこうした若者の役割はすでに植民地ナショナリズムの誕生においても見られたものであったとして、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』を引用し、植民地において近代的学校教育を受けた第一世代の青年たちは二重言語を身につけ、家族や近隣の人々と異なる知識世界をもち、「私はここに属さない」と感じる若者世代を形成した、と述べた。彼らは、彼らの属することのできる新しい未来共同体として国民(ネーション)を想像/創造し、彼らの知識や能力を必要とする近代的国民国家(ネーション・ステート)の指導者(政治家・官僚・教員等)となっていく。それからおよそ100年後にあたる現代においては、再び世界の各地においてITデジタル言語という第二言語を習得し、従来の世代やIT言語によるリテラシーを習得していない人々とは異なる知識世界の住民となった孤独な若者たちが登場してきた、と白石教授は述べる。

1990年代から約20年間、世界各地の約30に及ぶ都市や農村においてマンガ・アニメに関する現地調査を行ってきた白石教授は、ピーター・カツェンスタインの「国際化」と「グローバル化」の定義に基づいて、日本のマンガ・アニメの海外への広が

りはグローバル化のプロセスであったと指摘する。そのプロセスにおける主要なアクターは国民国家ではなくまずファンであり、彼らが友人・知人に伝え、ネットワークを創出し、関連する文化産業を起こし、流通網を形成し、個々人での創作活動(同人誌、プロ作家デビュー)を主体的に開始し、そうした諸活動の結節点としてのコンベンションやアニメ・エキスポ等々を開催してきた。マンガ文化はこうした文化的諸活動のセットとして新しい表現メディアや娯楽スタイル、ライフスタイル(Manga Café, Cos-play, networking, conventions etc.)及びビジネスモデルとして受容され、世界に普及していったのである。また日本のマンガは言語とさまざまな切り結び、言語が絵による語りをイラストしたり、また背景描写において心理状況を表現するなど、コマと絵と言語の間に立体的な関係性をもつ独特の文法を創りあげてきた。マンガ・アニメのグローバル化

は、このようなマンガのリテラシーとITデジタル言語を習得した海外の若者たちによって、主に担われてきたのである。

ファンや出版流通担当者・コスプレーヤーたちの写真、教授によって語られた海外現地調査の際のエピソードなどは、参加者たちの関心を強く引き寄せたようだ。また講演



〔写真は講演中の白石教授〕

演後は参加者の方々から積極的に質問が出され、子どものイノセンスや海外のマンガ・アニメファンの日本に対するイメージ、及びマンガ・アニメの著作権等さまざまな課題をめぐって議論が行われた。

これで今年度におけるセンター主催の連続講演会「グローバル化時代の人の移動とアイデンティティ：若年層に着目して」は幕を閉じた。この連続講演会は全体を通して、グローバル化時代のアジア太平洋地域における若い人たちの主体的な活動に焦点をあて、国境を越える人や文化の移動がどのように行われているのかを検討し、若い人たちの内面世界を探ろうとした試みである。21世紀のグローバル化の時代を迎えて、革新性と創造性に富んだ若い人たちの地域間、文化間のダイナミックな移動は、今までにない新しい文化、新しいライフスタイルの創造をもたらし、新しい時代を切り開いていくと考えられる。最後に、この連続講演会で講演していただいた先生方、及び参加者の方々に感謝の意を表したい。

報告

CAPS主催 共同研究プロジェクト中間報告会

CAPS主任研究員 愛甲 雄一

アジア太平洋研究センター(CAPS)では毎年複数の「共同研究プロジェクト」(3年間)が活動しているが、それが2年目の半ばを迎えた頃に、各代表者に「中間報告」なるものをお願いしている。これは、各プロジェクトの研究状況について報告していただくとともに、最終的な研究成果の見通しなどについて自由に語っていただく機会である。そこでセンターでは、今年も12月14日(水)午後10時30分(本学10号館第2小会議室)にて「中間報告会」を開催、今年度2年目を迎えたプロジェクト4件の代表者たちに、この報告を行なっていただいた。以下は、センター研究員のひとりとして本報告会に参加した筆者が理解した限りでの各プロジェクトの概要、ならびにそれに対する個人的な感想である。

「難民・強制移動民研究の新境地」共同研究プロジェクト (代表・墓田桂 文学部准教授)

本プロジェクトの報告は、代表の墓田准教授が現在在外研究で不在のため、プロジェクト・メンバーのひとりである山本哲史・東京大学特任准教授によって行なわれた。山本准教授によれば、主に国際法学でスタートした難民・強制移動民研究は、1980年代を境に社会学など、多様な分野で研究されるようになった。しかし、もともと難民や強制移動民に関わる問題は彼らの救済という実務的作業と不可分であり、そこに今度は学際性が加わったことで、その



〔報告中の山本准教授〕

の研究の方向性が著しく拡散してしまったという。本プロジェクトの狙いは、まさにこうした現状を乗り越えることにあり、と山本准教授は示唆する。おそらくこの点こそが、プロジェクトのタイトルに「新境地」という言葉が含まれた最大の理由であろう。

実を言えば、本プロジェクトは既にひとつの「新境地」を切り開いている。それは、国内避難民の保護に関する国際的な枠組みを示した文書 Guiding Principles on International Displacement の日本語版を、昨年度どこよりも早くに作成・出版(本センター紀要『アジア太平洋研究』No.35〔2010〕に所収)したことである。「難民」と聞けば普通、国境を越えての移動や移住を強いられる人びとが想起されるため、国境を超えない「国内避難民」については、研究どころかその存在すらあまり認識されてこなかったのが実状であった。しかし、東日本大震災ならびにフクシマの原発事故によって多数の「国

内避難民」がここ日本でも生まれており、そうした彼らの救済を考えるうえでも、この翻訳が果たす役割は実に大きい、と言えるだろう。事実、山本准教授によれば、本研究プロジェクトでは現在、この私たちの足元にいる「難民」をも視野に入れつつ、研究が進められようとしているようである。ゆえに、それが生み出す最終的な研究成果はこれまでの難民・強制移動民研究に対し、重要な一石を投じるものとなるのではないかと、筆者としても、大いに期待したい。

「環太平洋諸国とポストコロナリズム 通文化主義の可能性」共同研究プロジェクト (代表・大熊昭信 文学部特任教授)

現在、文学研究においては特に1970年代のサイドによる『オリエンタリズム』出版をきっかけにして、ポストコロナリズムと呼ばれる作品分析や批評が、たいへん盛んに行なわれている。



〔報告中の大熊教授〕

代表の大熊教授によれば、本プロジェクトでは、そうした作品分析のなかでも特に「通文化主義」と呼ばれる立場 さまざまな文化の間に立ちつつ、それらすべてを横断する共通性・普遍性を探ろうとする立場 に立って、主に英語で書かれたアジア太平洋地域の文学作品を分析していこうとしている。この試みが注目されるのは、筆者の理解では、プロジェクト・メンバーに学内外の英米文学専門家が多数集いながら、彼らの分析対象が「メインストリーム」の英米文学作品ではなく、民族的マイノリティ(ネイティブ・アメリカンや中国系・日系など)の諸作品、あるいは同じ「英語圏」出身でも英国・米国生まれではない作家の諸作品に向けられている、という点にあると思われる。こうした作品のなかからさまざまな文化的・民族的アイデンティティの融合や葛藤の表現、またはその様相などを析出することで、そこに単一の文化圏でしか通用しない言説ではなく、普遍性を帯びたオールタナティブな言説を見出すことが目指されている。

こうした試みの背後には、狭量な単一文化主義や各種文化を「尊重」するだけの多文化主義を乗り越え、文化間においては民族間の対立をも克服する道筋を、文学表現のなかから探っていきたい、というメンバー間共通の目的・規範意識があるようだ。その

意味では、本プロジェクトは単なる純粋な「文学研究」に留まらない、きわめて実践的な意図が込められたもの、と言えるだろう。

「近代『日本』の表象形成と環太平洋の地政学」
共同研究プロジェクト
(代表・遠藤不比人 文学部教授)

我々は普通、「日本人」とか「日本文化」の存在を自明なものとして語る。が、その際の「日本(的)なるもの」のイメージは、いったいどのような過程を経て形成されてきたものなのだろうか。本プロジェクトは、これまで日本社会に対しさまざまな影響を与えてきたアメリカとの関係、とりわけ、その両者の非対称的権力関係の中で生まれた芸術活動に着目しながら、そのプロセスを明らかにしようとしている。



〔報告中の遠藤教授〕

代表の遠藤教授によれば、既にこれまでに行なわれた幾度かの研究会を通じて、さまざまな「日本」の形成過程が明らかになったという。その例を教授は幾つも挙げられたが、本稿の筆者にとって最も興味深かったのが、サイデンステッカーの翻訳により『雪国』と『伊豆の踊子』が「ノーベル文学賞受賞者・カワバタ」の代表作へと祀り上げられていった過程、ならびにその意味についての説明である。これら2作が「カワバタ作品」の世界的な象徴になったことで、そこから「美しい日本」のイメージが形成されると同時に、冷戦という当時の磁場において、日本の文学作品が単なる「芸術品」と化し、ひいては「日本」のイメージそのものが脱政治化されることになった、という。実際の川端作品には「階級」の存在を連想させるものも少なくないが、これらが彼の「傑作」から抜け落ちたことで、ある特定の「日本」像が国内外を問わず、人びとの心象に結実した、というのである。

こうした「日本」の形成過程を幾つも浮き彫りにしようとする本プロジェクトの背後には、ある種の「日本」イメージがいかなる権力作用を通じて生まれてきたかを明らかにすることによって、それを脱構築していこう、という意図が見え隠れする。実際、遠藤教授は本報告会において、「複数の『日本』があってもいいと私は考えている」とおっしゃった。特に隣国との言い争いの場において、曖昧だが単一の「日本(的)なるもの」が、政治家の口から、あるいはネット上の名も無き人びとから、当然存在するかのごとくに発せられるこの国において、こうした「複数の『日本』」を積極的に認めようとする本プロジェクトの意義は、強調してもし過ぎることはないであろう。

「アイデンティティの創生と多元的世界の構築」
アジア・中国の磁場から共同研究プロジェクト
(代表・湯山トミ子 法学部教授)

本プロジェクトは、日々高まる「グローバル化」という世界の一元化圧力を前に、「多元的世界の構築」という明確に規範的な目的を掲げている。一元化の動きは今日「帝国」という姿をまとい、アジア太平洋地域を含む世界全体を政治的・経済的・軍事的・文化的に単一の色で染め上げようとしているかのようだ。が、それに対する抵抗もまた世界の至る所で、さまざまな形で行なわれているのは、周知のとおりである。湯山教授に率いられたこのプロジェクトでは、アジア地域、特に中国における人びとの「アイデンティティの創生」に関する過程に着目することで、そこに見られるこの抵抗の様子を焙り出し、その今後の可能性を探ることが、狙いとされている。

そうした研究作業は、本プロジェクトが開始された昨年度の初めから、主に言語をめぐる相克に焦点を当てて行なわれてきた。典型的には、かつて「大日本帝国」によってその植民地に対し行なわれた日本語強要政策の分析、などである。しかし湯山教授によれば、そうした支配・被支配という言わば上下の権力関係に注目してきたのがこれまでであったとすれば、残りの期間では、アジアのなかの横の関係

特に中華世界と、中東地域を中心としたイスラム世界との関係に注目して、さらなる「多元的世界」への模索を続ける予定だという。これは実に壮大な研究プランであると言えるが、しかし世界の多極化への展望を探ることはきわめて今日的な課題であるだけに、本プロジェクトが最終的に生み出す成果への期待は大きい。実のところ、本プロジェクトは既に数回に渡ってシンポジウム・拡大研究会などを開催しており、そのうちの1回については、報告書(『多元的世界への問い 帝国の時代の言語とアイデンティティ』〔三恵社、2011年〕)の発行にもこぎつけている。今後もさらに、海外からの論者も招いた国際シンポジウムなどを積極的に開催する予定だそうである。プロジェクト外にも開かれたこうした研究成果の還元は実に慶賀すべきことであり、筆者としても、今後の本プロジェクトの行末には、注目していきたい。



〔報告中の湯山教授〕

報告

CAPS招聘外国人研究員との研究交流

成蹊大学所属の研究者と外国人研究者との交流促進を目的として、アジア太平洋研究センター(CAPS)では、海外に在住している研究者の日本滞在に対し、助成を行っています。今年度は、この制度 - - 招聘外国人研究員制度 - - を利用して、2011年9月10日(土)から10月15日(土)までの約1か月間、ドイツ・ミュンヘン大学文化学部日本学科専任講師のSteffen Döll氏が成蹊大学に滞在されました。Döll氏には滞在期間中、本ニューズレターに以下のような記事をご寄稿いただいた他、10月4日(火)に本学10号館大会議室にて開催されたCAPS主催の拡大研究会において、「『筆を以って舌を傳ふ、眼を將って辭を聽す』 中世東亜における文化交流を巡って」と題された講演(日本語)を行なっていただきました。以下、Döll氏にご寄稿いただいた記事(英文)と合わせて、氏の本学受入研究者であった三浦國泰教授(文学部)によるDöll氏の紹介、ならびに研究会の様子を説明していただいた記事を、掲載いたします。

Some Thoughts on 'Brush Talks'

ドイツ・ミュンヘン大学文化学部日本学科 専任講師 Steffen Döll

It is not uncommon that Japanese tourists visiting Taiwan or mainland China tell anecdotes about how they used pencil and paper to ask for directions to the nearest tea shop. Writing the appropriate Chinese characters is a form of communication that seems to work even though the Japanese does not speak Chinese, and their Chinese counterpart equally does not know any Japanese. The overlap between their respective cultures that renders such a written communication possible is of course none other than the characters themselves that, though Chinese by origin, are an integral part of the Japanese script and language.

When one thinks about it more carefully, this is quite an astonishing matter. It is completely different from, say, a native English speaker that has acquired knowledge of French and thus is able to participate in a French language conversation. It is also different from the situation of two non-native language speakers communicating with each other in a shared, but equally foreign language—as was the case through much of European his-

tory, when Latin was the *lingua franca*.

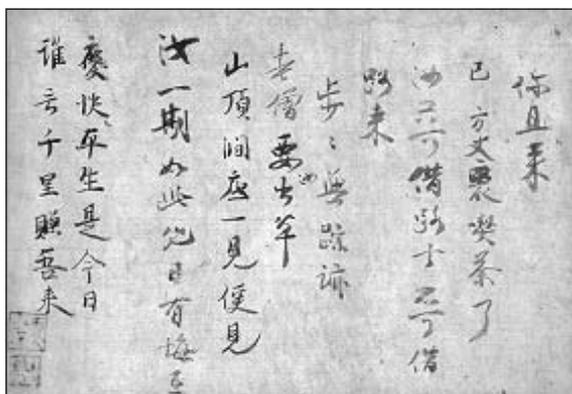
Nonetheless, situations such as the one described above are found with varying frequency throughout East Asian history. They have come to be referred to as “brush talks” (*hitsudan* 筆談 or *hitsuwa* 筆話) and were the instrument for Japanese, Kore-

ans, Vietnamese etc. to communicate with Chinese as well as with one another. They appropriated their knowledge of written Chinese, however, not directly by learning the language as such but mainly by the practice of *kundoku* 訓読, i.e. reading a Chinese text by transposing it into, e.g., Japanese (where the mechanics of this transposition are subsumed under the generic term *kanbun* 漢文). Accordingly, they would produce a text that was Japanese, but transposed its syntax into its Chinese counterparts. Thus in such a communication, we would see a Japanese speaking Japanese and Korean speaking Korean, but both of them sharing their respective thoughts with one another by way of writing Chinese.

This practice has drawn increasing attention in the last few years in the Japanese academia but so far has almost completely failed to reach Asian studies in Western languages. An example will illustrate how powerful an instrument brush talks were and accordingly how rewarding their in-depth analysis will be.



〔執筆者のDöll氏〕



[Taken from Ōsaka shiritsu bijutsukan 大阪市立美術館 (ed. 2006), *Sho no kokuhō: Bokuseki* 『書の国宝 墨蹟』, 103頁]

The Chinese Zen master Wuxue Zuyuan 無學祖元 (1226-1286) had arrived in Japan in 1280. Initially, he had expected to return to China after a sojourn of a few years but in reality remained in Japan until the end of his life. He presided over the Zen monasteries of Kenchō-ji and Engaku-ji in Kamakura, and it was also there that he met Kōhō Kennichi 高峰顕日(1241-1316) who should become his most important disciple. However, Wuxue did not speak Japanese and Kōhō had never been to China, and thus it was regularly the case that these two conversed by brush, ink, and paper. One of these papers is extant and gives us a fairly good idea about the nature of their exchanges.

Wuxue: Oh, you're back already!

Kōhō: Yes, I had some tea in the abbot's quarters. (A challenge to Wuxue, to whom these quarters actually belong.)

Wuxue: You may have found a way to get to my quarters unnoticed, but so far it is impossible for you to return hither without my seeing you! (You may pretend to be an abbot, but that does not mean that you've actually got what it takes to pull it through.)

Kōhō: I take it step by step, and I don't even leave a trace behind. (I move freely and easily. I have found awakening and am beyond your grasp entirely.)

Wuxue: This here old monk requires you to weed the garden! (Stop boasting already! Back down to earth!)

Kōhō: Although I stand on the highest mountain peak, I perceive what is happening at the bottom of the valley in one single look. (That I have found enlightenment does not mean that I neglect everyday things and common matters.)

Wuxue: That may be so for the moment, but there will come a time when you are sorry. (You might experience the ec-



〔拡大研究会開始前の会場の様子。平日の夕方からの開催にもかかわらず、多くの方々お集まりくださった。〕

stasy that accompanies initial enlightenment, but you don't seem to already have gone all the way.)

Kōhō: And this also will be pure bliss. My whole life is like this day. Who would want to say that I've come from afar merely in order to deceive? (That may be so. But to hit rock bottom is also a form of awakening. I have not the slightest intention to hide anything from you.)

What seems most interesting about this brush talk is that it verily conserves a Zen question-and-answer session (*mondō* 問答). In all probability it does so with even greater accuracy and truthfulness than in the case the student that writes down an exchange with her or his master *ex post*. It also proves that the brush talk was considered as a medium that was able to bear witness to the scathing criticisms and witty responses of Zen.

This conversation between a Chinese master and his Japanese disciple is, by the way, also found in Kōhō's *Recorded Sayings*. Ironically and most disconcertingly for the researcher, the protagonists' respective words are merely marked by "Wuxue said..." and "Kōhō said..."

連続映画上映会「映画を通じて知るアジア太平洋の世界」のお知らせ

アジア太平洋研究センター(CAPS)では年に数回、学内の学生・教職員、一般市民の方々を対象に、アジア太平洋地域に関する映画の上映会を入場料無料にて行なっております。つきましては、今年度3回目となる本上映会を、右記の要領にて開催いたします。予約などは一切不要ですので、どうか皆さまお誘い合わせのうえ、お気軽にご参加ください。詳しくは、センター事務室まで。

第3回上映会
上映映画：『嗚呼 満蒙開拓団』
(演出：羽田澄子、2008年、日本、120分)
日時：2012年1月27日(金) 18:15～
場所：成蹊大学3号館101教室
(参加費、事前申し込みは不要)

講演『筆を以って舌を傳ふ、眼を將って辭を聽す』

中世東亜における文化交流を巡って』を聴いて

文学部教授 三浦 國泰

まず最初に、シュテフェン・デル先生のご紹介をします。先生はミュンヘン大学の専任講師であり、若手の研究者として将来を囑望されております。デル先生は主専攻として日本文学・日本思想を、副専攻として中国思想を専攻され、幅広い東洋学を視野に入れております。その博識ぶりは、今回の研究会において存分に発揮されました。

研究会の講演題目は、「筆を以って舌を傳ふ、眼を將って辭を聽す 中世東亜における文化交流を



〔写真は、本研究会にて司会も務められた三浦教授〕

巡って』でしたが、すでにこの題目から先生の問題意識を見てとることができます。つまり中国、日本を中心とする漢字文化圏における東アジアの文化交流においては、交流の手段としての筆記性や文字性（独 Schriftlichkeit、英 Literacy）がいかに重要であったかという観点であり、ここには西洋の古典文献学や解釈学の主要な課題である「文字として固定された文章を、いかに生きた文章として解釈するか」という方法論が生かされております。デル先生は、鎌倉末から南北朝時代に栄えた「五山文学」を詳細に解説しながら、中国の知識人や僧侶の文献がいかに解説され、そして日本に受容されたのか、その具体的な例を見事に示されました。

実は「五山文学」はデル先生の博士論文のテーマであり、制限字数の関係上、その博士論文に基づく先生の講演内容を詳細に紹介できないのは残念ですが、大変印象深かったのは、中国の僧侶と日本の僧侶が実際に交わした「筆談（Pinselgespräch）」の例を、文献・資料に基づいて解説して頂いたことです。あたかも「筆による禅問答」を実際に「耳で聴いている」ような印象を抱いたのは、私だけではなかったかと思われま。また講演の中で、先生は

「眼」という漢字を「め」と読まずに「まなこ」と訓読みされており、私自身、「眼から鱗」という新鮮なインパクトを受けました。デル先生によれば、こうした文献解釈の問題は、決して狭い意味での古典文献学の問題ではなく、例えば、昨今の幅広いテキスト理論やコミュニケーション理論、そしてテキスト・リテラシーの問題として現在でも重要な課題を抱えていることを指摘しておりました。

講演の後半は、デル先生の今後の研究課題として「文人」という概念に焦点を当て、中国や日本における「文人」の存在について言及されました。この研究はデル先生の「教授資格申請論文」（Habilitation）のテーマであり、特に、中世から近世にいたる日本の「文人」の社会的な役割について考察を深めたいとの抱負を述べておられました。

講演のあと積極的な質疑応答があり、質疑は東アジアの漢字文化圏の文化交流の問題にとどまらず、例えば「ソクラテスの対話」を記録にとどめた、「プラトンの文献」をいかにして「ソクラテスの生きた言葉」として読むことができるのか、などという興味深い質問も提示されました。また「文人」の問題に関しては、デル先生からの補足的な付言として、ドイツのロマン派詩人のように観念の世界に自己満足していた存在とは異なり、一般に隠遁生活を送っていたかに見える、中国や日本の「文人」の存在それ自身が、俗世間に対する批判的姿勢として、なんらかの社会的、政治的意味をもっていたのではないかという鋭い指摘がなされました。参加者は当初の予定をはるかにこえ、デル先生本人もビックリするほどでした。最後にデル先生から、今回の成蹊大学滞在がご自身の研究に有意義であったこと、そしてこのような機会を与えて下さったアジア太平洋研究センターへの感謝の言葉が述べられました。

以上の報告のように、今回の研究会はドイツの東洋研究者と日本の研究者との理想的な東西文化交流になりました。今後ともこのような文化交流が続けられることを願ってやみません。この場をおかりして、またデル先生に代わって、招聘教授の立場から参加者の皆さんに感謝とお礼を申し述べたいと思います。

シリーズ 本を読む

Alex Gardner, Richard Bartlett, and Janice Gray, *Water Resources Law* (LexisNexis, 2009)

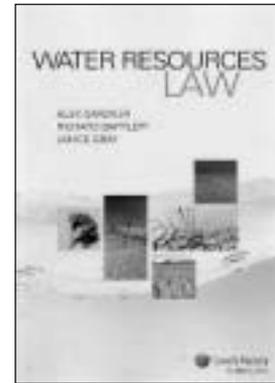
法学部 准教授 北島 周作

本書は、Alex Gardner, Richard Bartlett, Janice Grayの共著によるオーストラリアの水資源法の概説書である。言うまでもなく、水は、人間が生きていく上でも、また農業、工業といった各種の産業活動を行うにあたって必須の資源であるが、オーストラリアは、長年にわたりその不足に悩まされてきた。すなわち、オーストラリアの人口・産業が集中する南東部地域においては、20世紀後半以降、人口増加や産業の発展により必要とされる水の量が急増したにもかかわらず、この地域にはそれを支えるほどの降水量はなく、またダム等の大規模水資源開発は、社会的、経済的、環境的問題から控えられたため、主要河川のマーレー・ダーリング川流域では、水の絶対量が不足することとなり、水の過剰割当により、河川の水質悪化や塩害等の環境問題が深刻化することとなった。そうした問題を背景として、近年オーストラリアでは、連邦のイニシアティブに基づいて、各州において思い切った改革がすすめられてきた。そして、その改革の中核をしめる水利権取引制度は、特に同じく水不足に苦しむ国々から注目されているところである。本書は、そうしたオーストラリアにおける水資源に関する法制度の沿革、制度改革の背景とその内容を紹介しつつ、現在の制度の内容を分析するものである。

本書は、全7部26章で構成されている。紙幅の都合上、タイトルと内容をごく簡単に説明する。第一部「オーストラリアの水資源と水利政策」は、オーストラリアの水資源の自然環境面における特徴を描き、連邦・州における改革政策について概観する。第二部「水資源管理に関する制度枠組み」は、マーレー・ダーリング川の流域管理組織などの州際管理システムを含めて、水資源管理に関する枠組みを紹介する。第三部「水利権の性質」は、水利権について、コモンロー上の権利から制定法上の権利への発展を見る。第四部「水資源計画」は、水資源計

画の歴史等からはじまり、現在の計画作成システム、計画内容、計画の法的位置づけ等を紹介する。第五部「水利権の管理」は、水利権の申請許可手続を中心に、水利権者の権利義務、水利権の撤回、補償などの仕組みを見る。第六部「水取引」は、改革の中核である水利権取引に関する理論的問題（主として水利権の譲渡可能性の問題）について検討を行う。そして、第七部「結論」は、まとめとしてオーストラリアモデルの特徴を描き出している。

以上のように、本書は、オーストラリアの水資源に関する法制度(改革)に関して詳述するものであり、特に、世界でも先進的と評価される水利権取引制度に関する部分は、同じく水不足に苦しむ国々において、制度改革を考える上で大変参考になるものである。しかし、その内容を検討すると、このような改革は、オーストラリア固有の事情の後押しによりできたものであり、他の国々において実施可能かということ、必ずしも容易ではないことが分かる。すなわち、水利権取引制度の導入にあたっては、彼の地においては、取引に適した新しい水利権を設計、創設した上で、それを既存の水利権を置き換えているという、相当にラジカルな手法が用いられているが、これは、絶対的な水不足を背景に、水資源の効率的利用が差し迫った国家的課題として国民から認識されてはじめて行い得たものであるように思われる。現在、日本においても、ダム建設が抑制される中、夏場を中心に水不足が問題視されているが、果たしてどうであろうか。



アジア太平洋研究センター (CAPS) 活動報告 (2011.9.12 ~ 2011.12.15)

公開講演会、研究会、研究出張などの記録

9月12日(月) 難民・強制移動民研究プロジェクト海外出張(9月29日まで)
出張者: 東京大学リサーチアシスタント・新津 久美子
調査地: 英国、アイルランド、フランス
目的: 入国者収容所等視察委員会に関する研究、特にEU内の先例的な制度に関する現地調査研究
9月22日(木) 日本表象研究プロジェクト研究会開催、15:00-17:30
テーマ: 『仏作って魂(ソウル)入れず: 『日本の音楽』

の代表としてのピチカート・ファイヴにおける作者、文化、日本の表象」

講演者: 東京藝術大学非常勤講師・源中 由記
コメント: 東京大学名誉教授・佐藤 良明

場所: 3号館101教室

出席者: 5名

9月24日(土)・25日(日) 成蹊学園創立100周年記念行事・国際学術会議開催

テーマ: 『東アジアの歴史と思想』

場所: 4号館ホール

出席者: 230名

10月4日(火) センター主催拡大研究会開催、18:30-19:40

テーマ:『筆を以て舌を傳ふ、眼を將つて辭を聽す』
中世東亜における文化交流を巡って」

講演者: ミュンヘン大学専任講師・Steffen Döll

場所: 10号館大会議室

出席者: 40名

10月15日(土) 学園創立100周年・センター設立30周年記念連続講演会「人間の安全保障と東北アジア」後期第1回開催、15:00-17:20

テーマ:「多文化社会と越境対話 文化シティズンシップの実践」

講演者: 早稲田大学教授・岩淵 功一

場所: 3号館102教室

出席者: 30名

10月26日(水) センター主催連続講演会「グローバル化時代の人の移動とアイデンティティ: 若年層に着目して」第2回開催、16:30-18:00

テーマ:「文化移民 国境を超える若者とナショナルなアイデンティティ」

講演者: 明治大学准教授・藤田 結子

場所: 10号館第2中会議室

出席者: 15名

11月2日(水) センター主催連続映画鑑賞会開催、18:15-19:30

上映映画:『牛の鈴音』(2008年、韓国)

場所: 3号館101教室

出席者: 20名

11月4日(金) センター協賛・成蹊大学法学会主催講演会開催、16:30-18:00

テーマ:「アラブの春はなぜ起きたのか」

講演者: 東京外語大学教授・酒井 啓子

場所: 5号館102教室

出席者: 200名

11月12日(土) 学園創立100周年・センター設立30周年記念連続講演会「人間の安全保障と東北アジア」後期第2回開催、15:00-17:10

テーマ:「高齢化とグローバル経済のなかの社会保障の行方」

講演者: 慶應義塾大学教授・駒村 康平

場所: 8号館101教室

出席者: 40名

11月12日(土) 通文化主義の可能性研究プロジェクト研究会開催、14:30-18:00

テーマ1: 文学部教授・大熊 昭信による研究の現状報告

テーマ2: 東京外語大学教授・今福 龍太氏による講演

場所: 8号館405教室

出席者: 9名

11月26日(土) 学園創立100周年・センター設立30周年記念連続講演会「人間の安全保障と東北アジア」後期第3回開催、15:00-17:00

テーマ:「中国での環境問題解決への実践的アプローチと課題」

講演者: 工学院大学専任講師・酒井 祐司

場所: 8号館101教室

出席者: 50名

11月29日(木) アイデンティティ研究プロジェクト拡大研究会開催、15:00-18:00

テーマ:「語ろう! 考えよう! 漢字のことあれこれ 漢字、漢字文化圏、アイデンティティを見つめる試み、その一歩」

講演者: 一橋大学名誉教授・田中 克彦、聖学院大学教授・清水 正之、桜美林大学教授・青山 文啓

場所: 14号館大会議室

出席者: 80名

12月8日(木) センター主催連続講演会「グローバル化時代の人の移動とアイデンティティ: 若年層に着目して」第3回開催、16:30-18:20

テーマ:「私はここに属さない グローバル化の時代の若者文化を考える」

講演者: 東京大学大学院教授・白石 さや

場所: 9号館305教室

出席者: 30名

12月14日(水) センター主催中間報告会開催、14:00-17:30

報告者1: 東京大学大学院特任准教授・山本 哲史(難民・強制移動民研究プロジェクト)

報告者2: 文学部教授・大熊 昭信(通文化主義の可能性研究プロジェクト)

報告者3: 文学部教授・遠藤 不比人(日本表象研究プロジェクト)

報告者4: 法学部教授・湯山 トミ子(アイデンティティ研究プロジェクト)

場所: 10号館第2中会議室

出席者: 12名

センター招聘外国人研究員

9月22日(木) Johanna Wenny Rahayu氏(Associate Professor of La Trobe University, Australia)が「Integrating Global Aviation Data with Temporal and Spatial Weather Information」に関する研究のため来日(9月25日まで滞在)

9月22日(木) David Randy Taniar氏(Associate Professor of Monash University, Australia)が「Trends and Directions in Spatial Information Processing」に関する研究のため来日(9月25日まで滞在)

CAPS Newsletter No.113

2012年1月15日発行

編集発行: 成蹊大学アジア太平洋研究センター
〒180-8633 武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

☎ 0422-37-3549(ダイヤルイン)

FAX 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp

Web: http://www.seikei.ac.jp/university/caps/